



[資料紹介] 伝東殿塚古墳の埴輪片

著者	山田 暁
雑誌名	関西大学博物館紀要
巻	17
ページ	1-4
発行年	2011-03-31
URL	http://hdl.handle.net/10112/5156

【資料紹介】

伝東殿塚古墳の埴輪片

山 田 暁

1. はじめに

関西大学文学部考古学研究室では、植田兼司氏が収集された考古資料の寄託を受け、現在資料整理中である。寄託資料は各地から出土した瓦類を筆頭に多数な内容を含むが、この中に奈良県天理市中山町に所在する東殿塚古墳出土とする埴輪片5点がある。

東殿塚古墳は、天理市南部から桜井市にかけての山麓部に位置する前期大型前方後円墳が密集するオオヤマト古墳群中の一基である。東殿塚古墳の西側に隣接して、西殿塚古墳（手白香皇女衾田陵）がある。東殿塚古墳は前方後円墳で、前方部が大きく伸びた形状をもつ。墳丘は2段築成であるが、後世に大きく開墾され、古墳全面で削平を受けている。

墳丘規模についてみると、昭和46年に報告された『奈良県の主要古墳Ⅰ』¹⁾において、全長175m、後円部径82m、前方部幅70mとされている。また、昭和56年の『磯城・磐余地域の前方後円墳』²⁾では139mとされている。平成12年の報告書³⁾によると、墳丘下段は「前方後円墳を構築した上段とは異なり、下段の墳形は不明瞭」であるが、「下段北面には、幅23～28mの東西に区画した掘り割りが現状」ととどめることや、その南面は「下段裾には幅広いテラス」があり、「掘り割りと外堤が、前方部の南面まで区画されていた可能性がある」ことが指摘され、全長175mと推定されている。

埴輪についてみると、平成9年度に天理市教育委員会が実施した前方部西側の発掘調査⁴⁾では、鱗付楕円筒埴輪や円筒埴輪、朝顔形埴輪が出土している。鱗付楕円筒埴輪には、船や鳥などの線刻絵画が描かれていた。また、吉備地域に指標が求められる特殊壺型埴輪が出土し、同様に出土している西殿塚古墳や中山大塚古墳、箸墓古墳といったオオヤマト古墳群における前期古墳は吉備地域との関連の可能性が考えられる。

2. 植田氏収集の伝東殿塚古墳埴輪片

伝東殿塚古墳収集埴輪は、5点（H1～H5）ある。周知のように、川西宏幸氏による「円筒埴輪総論」⁵⁾と、赤塚次郎氏の「円筒埴輪製作覚書」⁶⁾の発表以来、円筒埴輪の編年研究は急速に進展し、埴輪をとまなう古墳の年代は、円筒埴輪からの編年を用いて時期がおおよそ推定できるようになった。

本論では、先学による成果を踏まえて、伝東殿塚古墳出土埴輪を概観していく。

H1（図1・写真1）形態は、円筒埴輪の突帯が剥離し、透孔をもつ破片で、体部から径の復元

は出来ない。残存する器高は10.4cmである。透孔は復元すると、方形または鍵形が考えられる。方形と考えるならば、透孔の横幅は4.9cmと復元できる。胎土は密で、0.5mmから2mm程度の小礫が多く含まれ、焼成が良好で、黒斑がある。調整は外面に1次調整として横方向のA種ヨコハケ⁷⁾が施され、突帯を貼りつけている。内面は斜め方向のハケ調整後、ナデが施されている。この資料において、注目できるのが突帯剥離部に方形刺突が2つあることである。この方形刺突は形状が縦軸0.7cm、横軸0.2cmの長方形で、若干横方向に礫の移動があるため、篋状の工具で刺突した後に、横方向に篋状工具を引きずるように動くと考えられる。なお、方形刺突を行った後にハケが施されている。また、方形刺突の間隔は5cm程度である。さらに、この方形刺突の下部付近に3.5mmの刺突とみられる点状の刺突痕も残っている。この方形刺突下部に点状刺突痕の間隔は3cm程度である。

H2 (図1・写真1) 形態は、円筒埴輪の突帯部の破片で、体部からの径の復元は出来ない。残存する器高は8.9cmで、突帯の高さは1.9cmである。突帯は断面で観察すると、上辺が下辺より迫り出しており、突出度が高い。そのため、川西編年でいうI期の突帯の様相をもつと考えられる。胎土は密で、0.5mmから2mm程度の小礫が多く含まれ、焼成は良好である。全体的に摩滅しており、調整技法などの観察が出来ない。

H3 (図1・写真1) 形態は、円筒埴輪の突帯部の破片で、体部からの径の復元は出来ない。残存する器高は4.8cmで、突帯の高さは1.25cmである。突帯は断面で観察すると、ほぼ台形を呈しているが、上辺が下辺より突出している。しかし、H2に比べると、厚みが増し、突帯の突出度も低く、重厚な印象をもつ。胎土は密で、0.3mmから1mm程度の小礫が多く含まれ、焼成は良好である。全体的に摩滅しており、調整技法などの観察が出来ない。また、突帯上部に線刻のような痕跡をもつが、痕跡残存が少ないため、すぐに線刻と判断は出来ない。

H4 (図2・写真1) 形態は、円筒埴輪の突帯部の破片で、体部からの径の復元は出来ない。残存する器高は8.2cmで、突帯の高さは1.3cmである。突帯は断面で観察すると、台形を呈している。そのため、川西編年のII期に繋がる断面台形の突帯の形状をもつ。胎土は密で、0.3mmから2mm程度の小礫が含まれ、焼成も良好で、黒斑がある。調整は外面に横方向と斜め方向のヨコハケが使用されている。内面は横方向と斜め方向にハケで調整後、横方向にナデが施されている。

H5 (図2・写真1) 形態は、円筒埴輪の透孔をもつ個体で、突帯部分はなく、体部から径の復元は出来ない。残存する器高は11.6cmである。透孔は復元すると、巴形、円形や半形が考えられるが、遺存する部分が少ないため、正確な形状がわからない。円形と考えるならば、透孔の径は7.0cmと復元できる。胎土は密で、0.4mmから2mm程度の小礫が含まれ、焼成は良好で、黒斑がある。調整は一部摩滅しているが、外面は横方向のA種ヨコハケを多用し、内面が横方向にハケで調整後、横方向のナデが施されている。

3. 各埴輪片の検討

辻川哲郎氏⁸⁾は突帯設定技法として、突帯の貼りつけは、器面に一定の間隔をもって、水平に貼りつけることと設定された。その際に、「規格工具を用いて、あらかじめ器表面に目印」である設定指標をつける有指標方式と「工具を用いずに、目分量によって突帯を貼付するやり方」である無指標方式があるとされ、これらを突帯間隔設定技法と定義し、主に有指標方式について検討された。

辻川氏はこの突帯間隔設定技法を復元する過程で、A～Cの3つの手法を提示している。A手法は、いわゆる「方形刺突」であり、方形のみならず、円形、不整形があり、約5cm間隔に棒状工具である「刺突工具」と板状工具である「規格工具」を使用して、刺突痕の下部にタテ方向線状圧痕を伴う技法である。このA手法が盛行する時期として、辻川氏は前期段階の円筒埴輪を挙げており、分布的には、畿内を中心にこの技法が採用されているという。

以上を視野に、H1を精察していこう。この資料の特徴として、突帯部剥離面の部分に突帯設定技法の方形刺突がみられる。報告書⁹⁾によると、突帯の設定方法は、東殿塚古墳の場合には、「方形刺突、ヘラ状工具の縦位圧痕あるいは沈線を巡らすもの」とされている。方形刺突は「一辺5mm前後の方形の工具端を胴部の突帯は貼り付け部分に押捺するもので、ほぼ等しい間隔で施される。」しかし、この方形刺突は形状が正方形に近いもので、H1の方形刺突は縦長の長方形を呈した形状をもち、明らかに形状が異なっている。そのため、突帯設定技法として、異なる特徴をもっていると考えられる。さらに、H1は方形刺突付近の突帯下部に刺突したような点状痕跡をもつ。辻川氏のA手法で埴輪を製作すれば、突帯貼り付け後、次の上段の突帯を設定するため、規格工具を器壁に立てていく。その場合、規格工具を立てる場所は「下段突帯の上辺にかわる」ため、「突帯上辺に点状圧痕が残される場合がある。」H1の点状痕跡が方形刺突のための何らかの設定と考えると、A手法とは異なる手法で製作された可能性がある。

4. おわりに

今回、伝東殿塚古墳出土の埴輪片をみてきたが、川西編年によれば、これらの埴輪は突帯の形状・黒斑・A種ヨコハケを使用していることから、川西編年のI期と推測できる。ただし、H3・H4に関しては、突帯形状がII期に繋がる様相がある。これらの特徴をみると、東殿塚古墳出土埴輪と共通した特徴をもち、東殿塚古墳に樹立された埴輪と措定しておきたい。特に、H1は従来の方形刺突とは異なる特徴をもつため、新たな資料が加わったといえるだろう。

また、東殿塚古墳出土の特殊壺型埴輪から考えると、西殿塚古墳は規模としても高い地位を誇った被葬者像を想定でき、東殿塚古墳と100mと離れず隣接していることから、西殿塚古墳と何らかの関係性をもつ被葬者であるのかもしれない。

最後に、植田氏収集の伝東殿塚古墳採集埴輪片を紹介するにあたって、米田文孝先生、十河良和氏、井上主税氏には多大なるご指導・ご鞭撻を賜った。末筆ながら記し、ここに深謝を申し上げます。

[註]

- 1) 白石太一郎「(21) 天理市東殿塚古墳」『奈良県の主要古墳 I』奈良県教育委員会 1971
- 2) 東潮「東殿塚古墳」『磯城・磐余地域の前方後円墳』奈良県立橿原考古学研究所 1981
- 3) 松本洋明「第3章 東殿塚古墳第1節墳丘」『西殿塚古墳 東殿塚古墳』天理市教育委員会 2000
- 4) 天理市教育委員会『西殿塚古墳 東殿塚古墳』天理市教育委員会 2000
- 5) 川西宏幸「円筒埴輪総論」『考古学雑誌64-2』日本考古学会 1978
- 6) 赤塚次郎「円筒埴輪製作技法覚書」『古代学研究89』古代学研究会 1979
- 7) 註5) 同掲
- 8) 辻川哲郎「突帯——突帯間隔設定技法を中心として——」『埴輪——円筒埴輪製作技法の観察・認識・分析——』第52回埋蔵文化財研究集会 2003
- 9) 青木勘蒔「第3章 東殿塚古墳 8節まとめ」『西殿塚古墳 東殿塚古墳』天理市教育委員会 2000

[参考文献]

- 赤塚次郎「円筒埴輪製作技法覚書」『古代学研究89』古代学研究会 1979
- 川西宏幸「円筒埴輪総論」『考古学雑誌64-2』日本考古学会 1978
- 辻川哲郎「円筒埴輪の突帯間隔設定技法の復元——埴輪受容形態検討の基礎作業として——」『埴輪論叢 1』埴輪検討会 1999
- 辻川哲郎「突帯——突帯間隔設定技法を中心として——」『埴輪——円筒埴輪製作技法の観察・認識・分析——』第52回埋蔵文化財研究集会 2003
- 天理市教育委員会『西殿塚古墳 東殿塚古墳』 2000
- 奈良県立橿原考古学研究所『磯城・磐余地域の前方後円墳』 1981
- 奈良県教育委員会『奈良県の主要古墳 I』 1971
- 坂靖「大和の円筒埴輪」『古代学研究178』 古代学研究会 2007

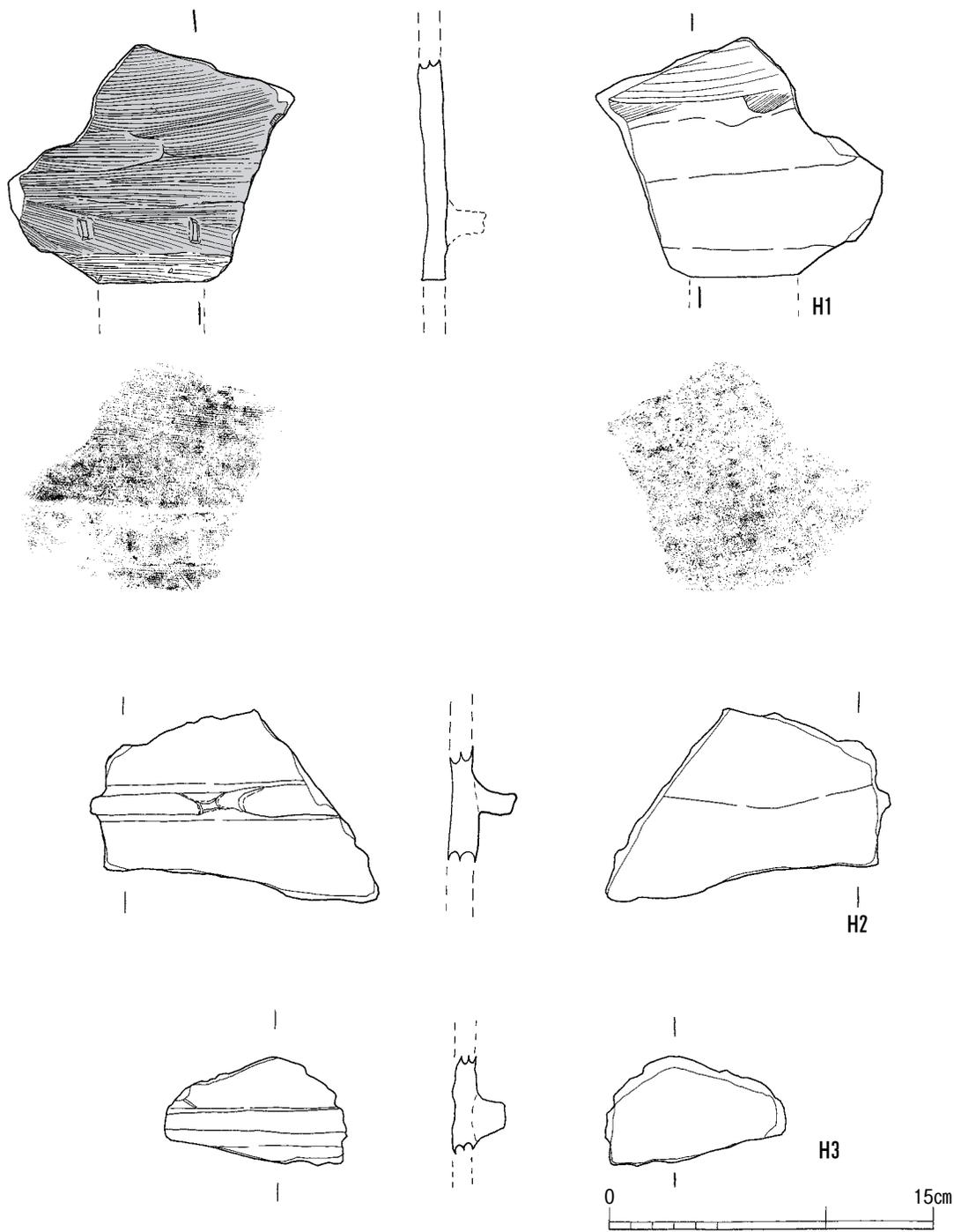


图1 伝東殿塚古墳収集埴輪 実測図(1)

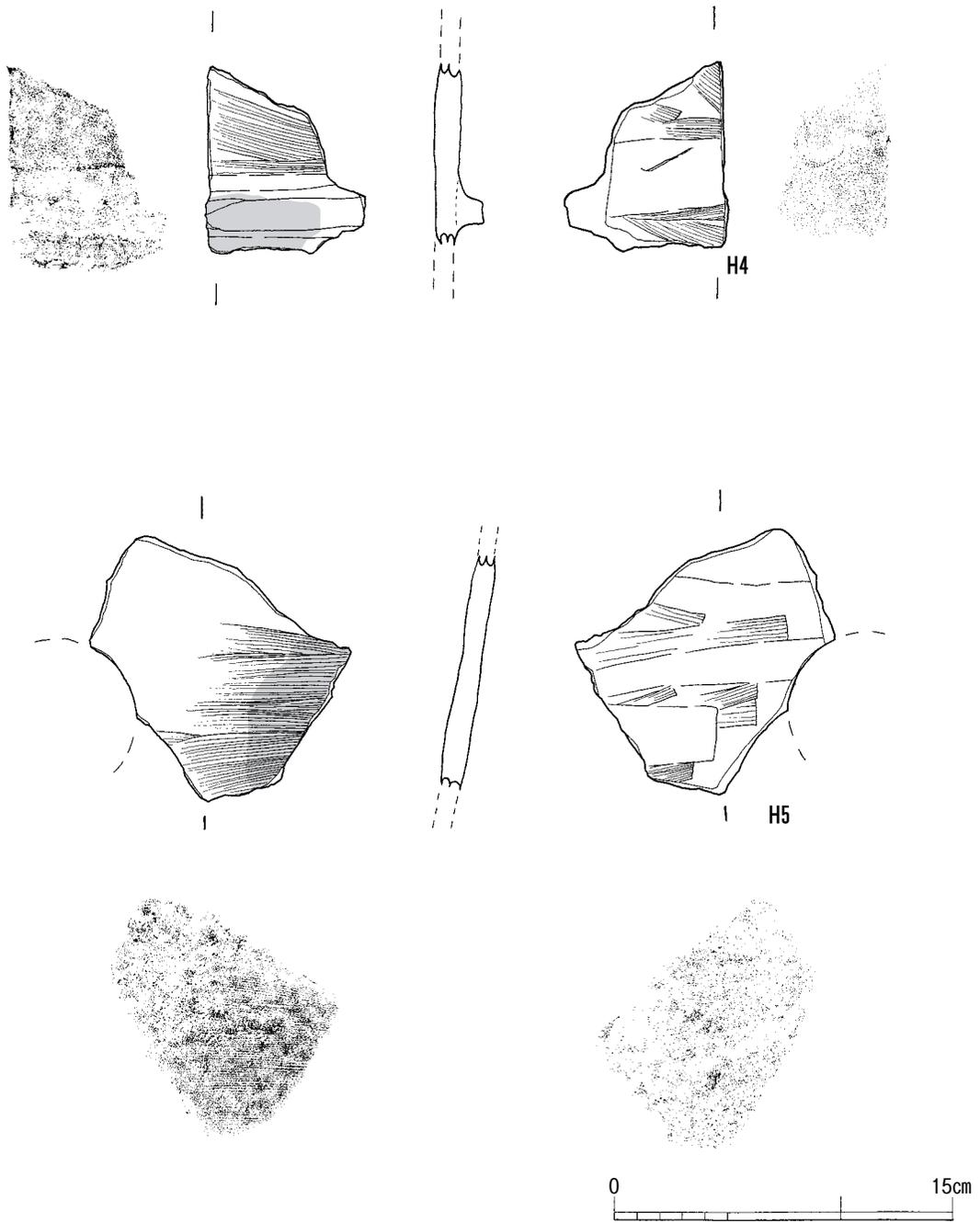


图2 伝東殿塚古墳収集埴輪 実測図(2)

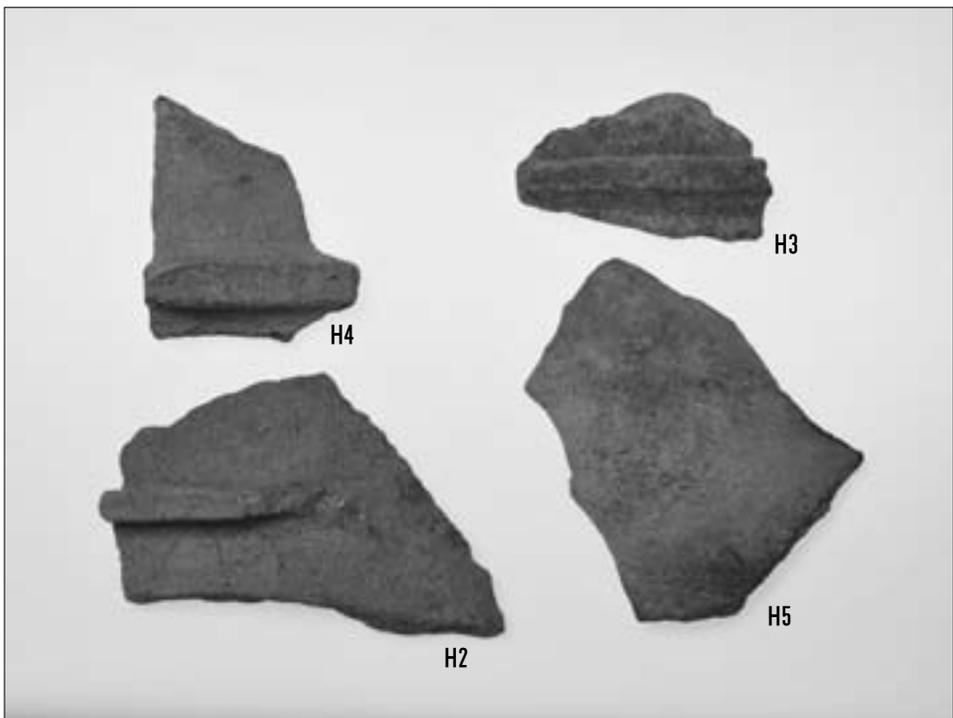


写真1 伝東殿塚古墳収集埴輪

